

と思う。

ノブドウの学名は長らく *Ampelopsis brevipedunculata* (Maxim.) Trautv. が使われていたが、より早い学名の存在がわかったので、*A. glandulosa* (Wall.) Momiyama (栲山, 本誌 52: 30, 1977) が使われるべきである。

台湾のツタは日本のツタと同じに扱われているが、琉球以南、東南アジアに分布するアマミナツツタ *A. heterophylla* (Bl.) Merr. である。

台湾のヤブガラシは日本のヤブガラシ *Cayratia japonica* (Thunb.) Gagnep. とされて、台湾には一種類しか認めていないが、台湾では *C. japonica* はまれで、多くは沖縄以南、東南アジアに分布するヒイラギヤブガラシ *C. tenuifolia* (Wight et Arnott) Gagnep. である。初島の琉球植物誌で明瞭に区別されているように、両者は別種だと思う。

台湾で *Grewia biloba* Wall. としているものは、大陸の *G. biloba* と異なるようで、*G. tenuifolia* Kanehira et Sasaki のほうが正しいのではないかと思う。研究する必要がある種類である。

カジノハラセンソウに *Triumfetta bartramia* L. (1759) が使われているが、これは *Bartramia indica* L. の引用をもとに命名された名で、命名規約の上からは不要名 *superfluous name* である。*T. rhomboidea* Jacq. (1762) とすべきである。

台湾で *Myriophyllum propinquum* Cunn. (Cum. とあるが誤り) としているタチモは、Meijden and Caspers が *Fl. Malesiana* (1971) で行なった処置に従ったものと思うが、オーストラリアの *M. propinquum* とは異なり、従来どおり *M. ussuriense* (Regel) Maxim. とすべきだということは、*Orchard* (Brunonia 2: 226, 1980) に詳しい。

台湾で *Bergia ammannoides* Roxb. としているものは *B. serrata* Blanco である (山崎, 本誌 68: 362, 1993)。

*Hydrocotyle keelungensis* Liu, Chao et Chuang (1961) は、琉球の *H. tuberifera* Ohwi (1951) と同じもののように思われる。

*Angelica hirsutiflora* Liu, Chao et Chuang は、種類としてはハマウド *A. japonica* A. Gray と同じでないかと思う、変種として扱うのが妥当のように思える (山崎, 本誌 65: 221, 1990)。

細かなことだけれど、*Barringtonia racemosa* (L.) Bl. (1828) は *B. racemosa* (L.) Sprengel (1826) である。また *Osmorhiza aristata* (Thunb.) Makino et Yabe (1903) は *O. aristata* (Thunb.) Rydberg (1894) である。

初版にあったミゾハコベ *Elatine triandra* Schkuhr. の図 (Pl. 819) はキカシグサ *Rotala indica* (Willd.) Koehne を混同したおかしな図であったが、2版では消されている。

初版と変わったのは異名の扱いである。2版では異名を大幅に削ってしまった。したがって上に述べた *Corylopsis matsudai* Kanehira et Sasaki, *Ilex taishanensis* Hayata, *Cayratia tenuifolia* (Heyne) Gagnep. などの、使用するのによいのではないかと思う学名は、2版には異名としてもでてこない。したがって従来使われたことのある学名がどう扱われたかがわからなくなってしまった。初版では主な異名を取り上げ、不明なものは *Insufficiently known species* として科の終わりに付記されていた。2版では付記は殆んど省かれ、異名は省略された。異名を省くことはアマチュア向けの本ならよいであろうか、学術的な内容を目指す本としては不十分である。研究するには初版も欠かせないものとなって、それに代わるものとはならない。細かく載せる必要はないが、初版程度の配慮は必要であろう。

早田、正宗先生の頃に比べると、台湾の植物ははるかに明らかになった。ここでは日本に関係するものの一部を述べたが、日本や中国の資料との比較の上にさらに研究を進めていただきたい。初版に比べると頁も増え、図も多くなった。ただ紙も印刷もやや劣るのは、日本と同様なバブルの崩壊の影響かもしれない。(山崎 敬)

□岩槻邦男 (監): レッドデータプランツ 208pp. 宝島社. ¥2,980.

別名は「日本絶滅危惧植物図鑑」である。いわゆるレッドデータブックとして知られる、「我が国における保護上重要な植物種の現状」(1989年) およびその後の調査に基づき、日本植物の危機的現状を広く一般に知ってもらうために刊行された。はじめ24頁にごく簡単な解説と用語説明がある。

岩槻氏の序文は、こういう図鑑やリストの刊行が、かえって危機に拍車をかけるという一部の根強い反対に対して、現状を率直に知らせることで意識の改善をはかりたい、という意気込みを感じさせる。またこういう全国的調査に必ず動員される、地域在住研究者の協力に対する思いやりがこめられている。88頁にわたるカラー図鑑では、各頁2-4種が種名、撮影地、危機度と共に掲げられる。産地は保護の観点から県名のみである。危機度は絶滅寸前、危惧、稀少と、カテゴリーに応じたマークがついている。後半約100頁には、それぞれの種についての簡単な解説がある。とくに危機の状況や推定される原因については、くわしく述べている。開発と盗掘がいちばん目につくが、本書刊行の理念が理解されることを期待したい。とくに、保護すればよいという大方の意識が改革されるためには、より一層の努力が必要だろう。

(金井弘夫)

□岩槻邦男：植物からの警告・生物多様性の自然史 252pp. 1994. 日本放送出版協会. ¥890.

生物学の基本は分類学である、と言ったり言われたりしながらも、分類学を学問や生活の中でどう位置づけるかについては自己主張の感が強く、万人を納得させる明快さが薄かった。近年自然保護にはじまって絶滅危惧種調査、野生生物調査などで分類学研究者の出番がふえており、キーワードとしての「種多様性」という言葉が、にわかには脚光を浴びるようになった。日本においてその演出をしたのが、著者の岩槻氏である。本書は生物多様性の探求・地球の生物はどれほど多様か・「種」とはどのようなものか・植物の類縁と系統・生態系を構成する種多様性・滅失する種多様性の6章より成る。分類学の役割を、地球生態系における種多様性の解明と意義づけ、野外調査の体験を引用しながら、種の生活の場と多様性の関係を説く。とくに、人類も植物と同等の種の一つに過ぎず、他の種との「共生」をはかることによって、快適な地球環境の維持をはかるべきだという主張

は、これ迄の「分類学」にはみられなかった立場で、分類学を「名前の学問」という誤解から脱却させる一助となる。専門用語がかなり多く、一般向きには少しむづかしそうだが、理系文系を問わず、ゼミの材料として豊富な話題を提供するだろう。(金井弘夫)

□角野康郎：日本水草図鑑 179pp. 1994. 文一総合出版. ¥15,450.

シダ以上の淡水産水草約200種を扱っており、日本の水草のほとんどを網羅する。海産種およびホシクサ科、イグサ科、スゲ属は含まない。環境の最も端的な指標の一つとして水質があるが、それを反映する水草は、最近脚光を浴びている。水草研究会もずいぶん分会員がふえたようだ。水草図鑑の需要は、保護や調査の現場でより切実である現状に鑑み、そういう人達にわかり易いことを心掛けたとある。本文150頁のうち74頁はカラーで、2頁ずつ交互に現れる。カラー頁は生態、全形、アップを揃え、花や果実の部分拡大や標本写真を示す。どれも見事な出来である。説明頁は各種の記述と、すべての種の分布図がある。分布図は著者自身が全国の標本を再検討したうえで作成したもので、文献情報はよほどの例外でなければ採用していない。再検討できない文献による分布図は、誤解を蓄積するおそれがあるからである。私もこの態度には賛成である。一旦地図に記された分布点は、無批判に受け継がれるからである。この立場からすれば、分布図の証拠標本のリストがないのは不満である。前記の理由の他、とくに水草の分布様態は、流動的だと考えるからである。今後のために、年代のわかる資料と分布図がのぞましい。こうは言っても、産地を明らかにすることでいらざる採集者に狙われる心配と、頁数がふえて採算が合わなくなる心配とがあるので、簡単には実現できないだろう。巻末に検索表、文献表、索引がある。水草図鑑は線画による大滝・石戸(1980)があったが、あいまっていっそう充実したものとなった。(金井弘夫)